



堀博. 『メコン河——開発と環境』 古今書院, 1996, xxiv+476 p.

この大著は、その後半生をメコン河にかけたあるエンジニアの「遺書」である。1919年生まれの著者、堀博博士は、前書きの中でそう述べている。これが意味するところは、後で述べよう。

「メコン」にはどこかロマンを秘めた響きがある。流域の自然、民族、文化のみならず、複雑で、ときに悲劇的な社会・政治史に対する愛着と関心が、このロマンを醸成するのであろう。日本の水工エンジニアにとっても、私も含めて、この河は特別の意味をもっているようである。それは、メコンが、戦後日本の最初の国際貢献の舞台になったことと関係している。1958年暮、できたばかりのメコン委員会 (Mekong Committee) から、日本に対して、全支流の開発ポテンシャルを踏査してほしいという、調査プロジェクトがもたらされた。時の日本工営社長久保田豊氏を総大将として、電源開発株式会社などから選ばれたエンジニアたちが勇躍して参加し、2年間調査研究に没頭したという。

1961年に提出された大きな報告書には、支流のもつ莫大な水力発電ポテンシャルの調査結果に加えて、実は、頼まれてもいない、メコン本流を制御する壮大なダム群の計画が盛りこまれていた。日本人の考えた本流計画は、あたかもアメリカのTVAモデルをメコンに植え付けようとするかのように、クラチエからルアンプラバンまでダムの階段を設けて、洪水制御、発電、水運、灌漑を同時に行い、流域の経済をまるきり変えてしまおうという、夢のような計画であった。これを実現するためには、関係沿岸国ラオス、タイ、カンボジア、ベトナム4カ国の協力・協調が必須であるという、いわゆるメコン・スピリットが強調されもした。

TVAやメコンの「大きいことはいいことだ」という開発理念は、1970年代に入ると急速に萎んでゆき、「小さいことこそ素晴らしい」という、パラダイム変換が起こった。大きなダムによる水没住民の移転などという扱いにくい問題に対処しがたく、またいわゆるエコロジストの牽制も受けて、

エンジニアが自信を喪失していった時期であった。加えて、インドシナ戦争の激化、終結、カンボジアの悲劇、3カ国の社会主義体制、そして再び自由主義経済への移行と、政治経済状況が目まぐるしく変動するなかで、メコン委員会は結局指導力を発揮することができず、単に国別の細々とした関連事業だけが進められてゆくのを座視する他はなかった。

メコン本流計画の眼目とされてきたビエンチャンのすぐ上流のパモンダムにしても、流域全体の総合開発への効果を考えると満水面標高250メートルの線は譲れないと、1970年代の終わりごろまでは私たちエンジニアは信じてきたのだが、水没地補償やその他の環境への影響を考慮して、それが240, 230, 210メートルと落とされてゆき、今や貯水をあきらめて流込み式発電を採り入れようとの計画に落ち着こうとしているありさまである。メコンデルタが欲している乾季の流量増強とか、カンボジアの洪水と旱魃を少しでも和らげる見通しを与えるとかの、そんな夢は消えたのであろうか。

さらに、1990年代以降は、タイを中心とする爆発的な経済成長の余波がメコン流域にも押し寄せつつあり、メコンの資源がビジネスの対象として取り引きされようとしてもいる。ここで要求されている「メコン」は、ややひがみっぽく言うと、単に水力電気を取りだし、また拠点大都市間交通の回廊を提供するだけの地域であるかのようである。

1995年、メコン委員会はより強力な機構として改組され、Mekong River Commissionと名を替え、近い将来中国とミャンマーを参加させる構えである。初代事務局長には日本の農林水産省の高級技官を送り込むことに成功した。日本のエンジニアが再び奮い立つ条件も揃ってきた。ここで、新しいメコン委員会は、どのようなメコン・スピリットを掲げ、流域全体の発展のためにどういう舵とりをするのであろうか。

ここまで、書評の枠をいささか逸脱するような文章を列ねてしまった。これは、著者堀博氏が、上の全期間を通じ、また全てのトピックにわたって身をもって参加し、それを本書で詳しくドキュメントしているからでもある。実は私も著者に少し遅れてメコン委員会事務局に30年間ほど勤務した経験をもつものだから、著者の文章に私自身の思いを重ねて、メコン開発の40年史を圧縮して記

してみると、上のような文章になってしまった。

本書は次の6章からなる。()内はページ数。

- 第1章 メコン河とその流域 (37)
- 第2章 下流域の資源開発の概況と将来性 (37)
- 第3章 下流域のダム開発計画——その変遷と国際協力 (127)
- 第4章 上流、瀾滄江とその本流ダムの開発 (25)
- 第5章 ダム開発の環境問題——熱帯大陸河川の場合 (172)
- 第6章 新メコン委員会の設置と今後の開発 (57)

章だでのタイトルだけをみると、なにやら官庁文書風で、どうもいただけないが、内容は極めて精緻で、かつ重い。

著者自身は、本書の中心は第5章の環境問題にあり、ここで著者の思いのたけが語られているという。ちなみにこの部分は、東京大学に提出した博士論文のハイライトだとのことである。しかし私には、むしろ第3章におけるメコン開発計画の徹底的な検証と、第6章の新しいパラダイムや最近の流動的な状況を詳しく綴った部分がより魅力的である。このために本書がメコン開発の「標準書」になりえていると思うからである。

何しろ、著者は1955年フルブライト留学生として渡米してTVAに代表されるアメリカの河川総合開発の感覚を磨き、1959年から2年間は冒頭で述べたメコン支流開発調査に参加し、1964年から68年まで4年半メコン委員会事務局に勤務して流域開発のマスタープランを仕上げ、その後もアジア開発銀行やUNDP ニューヨーク本部からメコンを見守る傍ら、時に応じてメコン委員会のコンサルタントとしてマスタープランのレビューなどをこなしてきた人物である。そんな人が、メコン委員会その他の膨大な論文・報告書・資料などを驚くほど丹念に読み込んで書いたメコン開発40年史(第3章と第6章)に、迫力のなかりうはずがない。原典の多くが官庁文書のせいか、この部分は決して読みやすくはないが、ずっしりとした手ごたえがある。

先に述べたように、第5章(環境問題)はより学術的である。メコンの事例に加えて、ナイルのアスワンハイダムや諸外国の事例研究を涉猟し、以下の要素をとりあげて解説している。自然環境変化として、ダム湖面蒸発、ダム湖漏水、貯水池築造

と地震、ダム湖岸崩落、ダム湖の水温、富栄養化、堆砂、ダム下流の河川変化、デルタと河口部への影響、漁業への影響、野性動物への影響など。さらに、社会環境変化にも目を配り、水没移住の問題、遺跡の水没喪失、観光開発、それに水関連疾病が論じられている。これらは、40年間も調査ばかりやってきた(?)メコン委員会がもっとも誇りとする研究成果であり、私も、ひょっとして世界でもっとも進んでいるのではないかと思っている。

著者のメコンへの想いは第6章でもっとも強く吐露される。それは質の高い提言のかたちをとる。例えば、こうである。

「河川がエネルギー開発という単一目的で一面的に評価され計画され、経済的見地からのみ開発されたのでは、川が泣く」、「(フランスなどが勧める)流込み式低ダムによる本流開発案を採用してしまうと、もはや従来から期待されているデルタの洪水をコントロールすることも、タイ東北部の灌漑に資することも一切できなくなる」、しかし、「タイ東北部灌漑のための、(タイ単独の)メコン—チー—ムーン取水計画は、直接メコン河の水を減少させる暴挙だ」。「新しいメコン委員会は、水文観測にとどまらず、水文監視・査察制度をとりいれよ」、「新しいメコン委員会の諮問委員会には、学者の起用は好ましくない。実際にアジアの国際河川の総合的開発計画を策定した経験をもつ者を中心に」、「計画の調整はすべて新しいメコン委員会を中心に」と、提案は具体的である。

「新聞の見出し的な『メコン流域に商談の季節到来』というような安手のスローガンに踊らされてはならない」、「大切なことは、6カ国の政府がそれぞれエゴイスティックな経済発展を願わず、経済だけでなく、むしろ安定した社会の構築を心がけ、心のありかたと個人の生活を大切に想う生き方を選択することだと思う」。

水工エンジニアとして若いときからダム開発の現場に立ち、いくつもの大きな河川総合開発を手掛け、環境問題と政治経済的な国際紛争に揉まれる中で到達した「開発観の高み」からの発言である。後事を託す若い世代に、このことだけは書き遺しておきたかったに違いない。「遺書」と言った所以であろうか。及ばずながら、私も後塵を拝して行こう。

(海田能宏・東南ア研)

石井米雄；横山良一. 『メコン』めこん，
1995, 192 p., カラーグラビア写真79葉.

必ずしも学術書ではないこの本を、このような学術雑誌の書評欄で紹介するのは、ふたりの著者にとっては迷惑なことであるかもしれない。それは承知の上で、私としてはこの場をかりて、メコンのような大自然に人の手を加えるとはどういうことなのか、ということ、本号別項で紹介した堀博著『メコン河——開発と環境』と関連させて考えてみたかったのである。

「眼前のメコンは、人間の歴史などまるで眼中にないかのように、ただもくもくと茶褐色の巨大な水のかたまりを運び続けている。その姿は28歳の私を感動させた」。爾来、石井米雄教授はメコンへの関心を40年近くも保ち続けて今にいたる。この間のメコンとの関わりを、「私的なメコンの物語」として紀行文のかたちで私たちに物語ってくれる。

「メコンのすべてを見たいと、源流チベットから南シナ海まで、戻ることのない河の流れのような旅」を続ける1950年生まれの写真家横山良一氏の、カラーグラビア写真79葉からなる「写真叙事詩」は、石井教授の縦組みの紀行文の後側から、横組みでメコンの流れに沿うように展開する。氏のすべての写真に通底する気分は、一言でいうと、「静謐」である。

「私的な物語としての紀行文」と「メコン写真叙事詩」であるからには、この本の構成や論理性などを詮索する必要はない。紀行文は、石井教授が28歳ではじめてメコンに接した1957年から、ごく最近の旅行までを含む幾度かの紀行のフィールドノートから再構成され、河口からチェンセンまでのすべての区間をカバーするように工夫されている。石井教授の視点は、「時には国際法秩序を生み出した歴史的産物（国境）の存在を忘れ、そこに住む住民の目で空間を眺めてみることも必要なのではあるまいか。そこから、世界地図が隠してしまった別の世界の図柄が見えてくるかもしれない」という文章に集約されている。

とは言え、この本の通奏低音は、メコンとその支流の、水運（や陸運）による地域間の交易、その結果としての経済圏や政治圏成立の歴史的考察である。ボートに乗ってメコンを上り、下り、ま

た川沿いに車を走らせつつ、眼前に展開する景観を流麗な筆致で記述しながらも、著者は、その地域の歴史像の中にフッと読者を誘いこんでしまう。例えば、東北タイのムーン川のかつての舟運の原風景、多くの大支流が流れ込むストゥントレンを中心として形成されたであろうアンナン—ストゥントレン—カンボジア北部—タイを結ぶ広域交易回廊の存在の可能性、アンコール文明の経済を支えたであろうトンレサップ湖とメコン河の水運交易の殷賑ぶりなど、地域史への新鮮な視点を与えてくれる。サイゴンから中国西南部への舟運路開発を目的として行われた1860年代のフランスのメコン河踏査隊が、サンボールへんからいくつものラピッドに遭遇し、コーヌの滝に行く手を阻まれるに及んで、ついに舟運開削をあきらめてしまった顛末も詳しく語られる。ここらは、歴史家としての石井教授の面目躍如たるものがある。

メコンに住む住民の目で見たメコンはどう描かれているであろうか。ルアンプラバンからチェンセンに通う定期船が、急流にさしかかるたびに船客を下ろし指図して岸から引綱で引っ張らせながら、舟子たちはといえば、船首に立ってエイ、エイと足踏みするばかり。実はこうして舟魂を元気づけなければこの急流はとでも乗切れないという、ほほえましい光景が好意をもって描写される。あるいは、最新式フェリーの恐らく数百分の一のコストしかかけていないようなオンボロ木造フェリーが、見事な舵さばきでメコンを行き交いする様子を暖かく見守っている。

昨今のテレビドキュメンタリーなどで、例えば、深くシワを刻み込んだメコンの漁師の顔を大写しにし、「もう開発はいい、メコンはこのままそっとしておいてほしい」と言わせたりする。堀氏がメコン委員会を通してメコン開発を論じ、そして石井教授が歴史家の目でメコン流域の歴史像を語るときには、いずれも極めて迫力があり、説得力がある。ところが、地域の住民の目を通して見、かつ語らせようとするときには、三者三様に甘くなってしまう、といえ言ひ過ぎであろうか。より深く住民に接する中から、彼らの自然観、風土観、生活観、開発観などを自然なかたちで語らせるような、メコン地域研究が待たれるような気もするのである。

(海田能宏・東南ア研)

Lorraine M. Gesick. *In the Land of Lady White Blood: Southern Thailand and the Meaning of History*. Ithaca: Southeast Asia Program Cornell University, 1995, 98 p.

1. Introduction
2. Phatthalung and the Problem of History
3. Royal Texts and Local Meanings
4. The Historiography of Southern Thailand
5. Landscape and History
6. National History and Local History

この本は、著者 Gesick がタイの国立文書館で入手した、ある歴史資料——南部タイのパタルン地方につたわる「白き血の姫 (Lady White Blood) の物語」——が、いかにしてパタルンの地から持ち出され、新たな歴史的価値を与えられながら「タイ国史」の一部となっていったか、そして、もともとその物語は南タイではいかような価値を与えられていたか、ということを読み明かす、いわば「物語の成立物語」とでもいうべきものである。その意図としては、Gesick 自身が冒頭で述べているように、これらの資料とそれをはぐくんできた社会の研究を通して、17世紀から現在までの南タイ地方の人々の歴史感覚を明らかにしようとする試みである。

ここでは物語の筋はさほど重要ではない。なぜなら、この資料は中央からやってきた王族によって20世紀初頭に「収集」されたとき、パタルンでは内容を読まれることなくむしろ信仰の対象としてある寺に奉られていたのだし、またこの研究はこのテキストを「唯一の歴史記述」としてその価値を検証することを目的としているわけではない。Gesick がいうように前近代のパタルンにおいては「history」は「histories」であり、multi-vocal (多義的、あいまい) なものであったからだ。この物語には超自然的でシンボリックな要素がみられるが、現存する写本は17世紀に成立したらしいとしても、その内容にはさまざまな口承伝統の要素が混入し、その歴史記述にはときどきの時代感覚・歴史感覚が反映されており、相対的に閲覧できる文字資料の少ないタイの前近代史においては、そもそも比較検討による資料批判は困難であり、しばしば無

意味である。

歴史研究における「文字資料」と「非文字(声)の資料」の扱いをどうするかという課題はすでに永く宿題となっているが、我々はなかなかよい解答を見いだせないでいる。歴史というものは極めてさまざまな文化概念・現象を時間と空間にちりばめながら抱え込んでいるものであり、ことに口承伝統を「記述」する作業においては、記述者自身の「歴史感覚」が影響せざるを得ない。南部タイ、パタルンの世界にとっての「異邦人」である著者の Gesick 自身が苦しみつづ示唆するのは、これらの「歴史感覚」というものは、その「土地の風景」によって生まれ、その multi-vocal な「歴史記述」の中に隠されているのではないかということであった。

しかしながら、この本が描き出そうとしている「土地に根づいた歴史感覚」(「伝統的歴史感覚」といってもいいだろうか) は、一般化するにはいまなお説明が困難であり、しかもおそらく、より近代西欧教育を受けた者ほど困難ではないかと予想されるのである。この方法論の応用にあたっては我々はまた新たな「宿題」を抱え込んだことになる。しかしながら、すでに近代西欧教育による「科学的歴史感覚」となじみの深いアジア人としての我々にとっては、この「伝統的歴史感覚」が「近代的歴史感覚」にかわっていく瞬間を理解することはむしろ容易であろうと思われる。

Gesick はこの本の最後で「白き血の姫」テキストの物語は終わったわけではないという。彼女は、パタルンの故地からとりあげられ、国立文書館で埃をかぶっているこの資料の複製を作り、それがかつてあった本来のパタルンの寺に「戻した」。このテキストを信仰しそれを支えたパタルンの口承伝統は完全に絶えたわけではなく、そこからまたなにかがはじまることを彼女は期待する。そのテキストを風景の中に戻すことで、彼女は自分自身がこのテキストに係わる物語(風景)の一部となることを望み、だからこそ「物語はまだ続く」のである。

(黒田景子・鹿児島大学)

Jeffrey A. McNeely & Paul Spencer Sochaczewski. *Soul of the Tiger: Searching for Nature's Answers in Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1995, 390 p.

小説の書名のようなのであるが、著者ふたりの20年以上にも及ぶ東南アジアでの人と動物（野生生物）とのかかわりの研究から、過去の両者の関係、現在のその変化の様子、そして、将来の両者の健全な関係のあり方を述べたものである。

著者の Jeffrey A. McNeely は現在 IUCN (International Union for Nature and Natural Resources, 国際自然連合) の生物多様性プログラム, Paul Spencer Sochaczewski (旧姓 Wachtel) は WWF (World Wide Fund for Nature International, 世界野生生物基金) の Creative development の責任者である。

本書の初版は Doubleday (1988) であるが、その後 Pragon House Pub. (1990), Oxford University Press (1991) などで版を重ね、今回 A Kolowalu Book (Univ. of Hawaii Press) から出版されたもので、かなり広く読まれているものらしい。

「太陽の神ガルーダ」、「白象」、「血のスポーツ」、「虎の魂」など30もの章から構成されているが、そのいくつかはシンガポール航空の機内誌 Silver Kris, あるいは Reader's digest などに掲載されたものを再録している。章ごとに、ふたりの得た体験・実話をもとに、文献・論文などで話に肉付けしたものである。会った人々との会話のかたちで話が進められるところが多い。しかし、著者のひとり McNeely の主滞在地タイから、もうひとりの著者 Sochaczewski の主滞在地ボルネオやジャワへ話が突然にとび、時にとまどいを感じるところがある。別々の体験を「わたし」として、記述していくためである。

まず、西洋では忌み嫌われる恐ろしい毒蛇キングコブラが東南アジアではナーガとしてヒンドゥ教の最高神ヴィシュヌ神を、仏教寺院ではブッダ像を護り、さらにイスラム教の優勢なインドネシアでも短刀クリスの中に波打った刃として象徴的に生きていること、また、インドネシアの象徴ガルーダも、もともとヴィシュヌ神の乗り物、不死身のガルーダそのものであることなど、宗教を越

えて東南アジアに存在する動物観を、歴史とのかかわりをもたせつつ述べる。

ついで、ボルネオのイバンは今日でも野生動物、とくに鳥を神の使者と信じ、その行動で予兆を確かめ、決めごとをする、あるいは東南アジアで広く行われていた首刈りが、現在では闘鶏・闘牛などの観戦型スポーツに置き換わっていることなど、過去の動物観、動物（野生生物）との興味深いかかわりが、まだ潜在的に現在、残っていることを述べる。「ジャングルの雪男」での中国を含めたアジア南部での「未確認熱帯アジア産ホミノイド」も読み物としては、おもしろい。

そして、現在、東南アジアがかかえる問題、すなわち、絶滅の危機に瀕する動物の保護策の実践と繁殖への取り組み、保護を妨げる社会条件、すなわち、動物の貿易・国際取引などを、あとのいくつかの章で述べる。ふたりが国際的な自然保護団体の活動家として、実際の保護事業にたずさわっていただけに、東南アジアの動物保護、その実践と挫折の体験談にもっとも力点がおかれ、ペットとしてのオランウータン、漢方薬犀角としてねられるサイ、医学実験用としてのサルなどの密猟、密輸の実態、国際取引の条約上の不備などがよくわかる。

最後に、人々と自然のかかわり・関係を変化させた4つの大きな生態文化革命 (ecological revolutions), すなわち、火の使用 (制御)、動物の家畜化と植物の栽培、灌漑、そして世界市場の発展を述べ、次の第5の生態文化革命は神話や人々の記憶の中に残されている伝統的な知識や洞察力を敬い、認識することで達成されるもので、その第5革命こそが現代社会が永遠の自然保護を達成でき、野生生物との共存ができるものだと強調する。しかし、東南アジア各地で進行中のダム建設など開発によって、自然が大きく破壊されている現実を紹介しながら、どうすればいいのか、具体的な方法はやはり記述していない。

なお、本書には「ソウル・オブ・ザ・タイガー 東南アジアの人と自然」(野中浩一訳, 心交社 1993) として訳書がでてい

(渡辺弘之・京都大学農学部)